「馳組戦」考

佐伯真一

はじめに

近年、歴史学の領域において、合戦の具体的な分析が活発化していることは、周知のとおりであろう。その際、平安時代から鎌倉時代頃の戦闘の具体的な分析にあたっては、武具の遺品などと共に、軍記物語や説話などの文学テキストの分析が必須となることも知られているだろう。鎌倉前期頃までの合戦の分析には、多くの場合、文書や記録を用いることが難しく、具体的な戦闘のあり方を検討しようと思えば、文学テキストの分析に頼らざるを得ないのである。そして、文学テキストの分析による戦闘実態の解明が、歴史学のみならず、文学研究の立場からも、軍記物語など合戦を扱う作品の研究に資するところがあることは言うまでもあるまい。

そうした中で、戦闘の形態の一つとして重視される概念に「馳組戦（はせくみのいくさ）」がある。合戦の分析において、これが如何に重要な概念であるかについては次に述べるが、その重要さにもかかわらず、この語は用例に乏しく、小学館『日本国語大辞典』をはじめとする、現代の主要な国語辞典・古語辞典の類にも立項されていない。従来、言葉としての検討が十分になされてきたとは思えないのである。本稿では、そのわずかな用例を検討して、従来の議論に欠けたところを、いささかなりとも補いたい。

一、「馳組戦」の概念と根拠

「馳組戦」とは、騎馬武者が、互いに馬を走らせながら矢を射合う戦いのことであるとされている。現在の歴史学における代表的な論著から引用してみよう。

・「（従来の一般的な説明では）戦闘の主役はやはり騎馬武者で、

その戦闘の基本的形態は「騎射（うまゆみ）」戦、とくに馬を走らせながら敵を射る「馳組み」戦であった」（川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ①』）

- 「むろん楯突戦だけで合戦に決着がつくわけではない。いずれは楯の外にでて、騎兵同士が馬を馳せ合いながら矢を射合う戦闘となるであろう。それを楯突戦に対して「馳組戦（はせくみのいくさ）」というが、馳組戦が騎射戦の本質であることは間違いない」（近藤好和『弓矢と刀剣②』）
- 「通例戦場の華と目されている騎馬武者同士の弓箭による闘いを、馳組戦（はせくみのいくさ）という」（高橋昌明『武士の成立、武士像の創出③』）

つまり、合戦の初めには、まず、楯を突いて遠くから矢を射かけ合う「楯突戦（たてつきのいくさ）」が行われるが、それに続いて騎馬武者が馬を走らせて接近しながら互いに弓を引く「馳組戦（はせくみのいくさ）」が展開され、これが合戦の中核的な位置を占める。平安期から鎌倉前期頃までの合戦とは、そのようなものであるとするのが従来の通説的な理解であった。もっとも、右の三氏のうち、川合・高橋両氏は治承・寿永期（源平合戦期）にはそれが衰退し、組み打ちが合戦の重要な部分を占めるようになったとするのだが、それ以前の時期にはやはり「馳組戦」が中心であったと見ることに変わりはない。いずれにせよ、「馳組戦」は、この時代の合戦（戦闘）を分析する上で重要な位置にある概念なのである。

だが、その戦闘の実態について、あるいは「馳組戦」がいつ頃の合戦においてどの程度合戦の中心を占めたのかといった問題については、ここでは立ち入らない。ここで考えたいのは「馳組戦」の語義、つまり、そもそも「馳組戦」という言葉が、互いに馬を走らせながら矢を射合う戦いのことを指していたのかどうか、という点である。なお、以下、混乱を避けるため、馬を走らせながら矢を射合う戦いを「馳射戦」（はせゆみのいくさ・ちしゃせん）、静止した馬上での弓射を含め、馬上で弓を射合う戦いを「騎射戦」（うまゆみのいくさ・きしゃせん）と呼んでおく。

「馳組戦」という言葉が、右のように馳射戦と同義に解される根拠の一つは、おそらく『今昔物語集』巻二五第三話「源充平良文合戦語」であると思われる。周知の話だが、源充（「宛」とも）と平良文が、讒言によって仲が悪くなり、兵を率いて野原で相まみえた。しかし、今にも戦いを始めようとした時、良文が申し入れて、充と良文の一騎打ちとなる。二人は秘術を尽くして戦い、互いの力量を見定めると戦いをやめ、以後は仲良く暮らしたというのである。この二人が、矢をつがえては馬を走らせて、すれ違いざまに馬上から射合う戦いぶりが、「（郎等達は）各主共ノ馳組テ射合ケルヲ見テ④」

と表現される。この例では、確かに、一対一で馬を走らせながら矢を射合う戦い（馳射戦）が、「馳組テ射合」と表現されているわけである。また、二人の「馳組」の前に、楯を並べて向かい合う両軍の姿が描かれていて、「楯突戦」から「馳組戦」への展開という、現在の通説のモデルにふさわしい叙述を見せているともいえよう。

だが、『今昔物語集』全巻を通じて、「馳組」の語は、この二五―三話に右のような動詞としての用例が一例あるのみで、「馳組戦（はせくみのいくさ）」という言葉が用いられているわけではない。現在の「馳組戦」という概念は、おそらく、延慶本及び長門本『平家物語』の小壺（小坪）坂合戦における和田義盛の言葉の中に、「楯突軍ハ度々シタレドモ馳組軍ハコレコソ初ナレ」（延慶本）[5]とある例に基づきつつ、『今昔物語集』をも勘案して作られたものであろう。この例は、和田義盛が畠山勢と戦おうと、小壺坂から由比ヶ浜へ向かう途中、古つわものの三浦真光に尋ねた言葉の中に出てくるものであり、真光はこれに答えて、「昔様ニハ馬ヲ射事ハセザリケレドモ…」で知られる戦の故実、近藤好和の命名によれば「真光故実」を語ることになる（なお、該当部分は源平盛衰記にもあるが、盛衰記では、「楯突ノ軍ニハ度々アヒタレ共、馬ノ上ハ未レ知[6]」と、「馳組」の語は用いていない）。ここでは「楯突軍（たてつきのいくさ）」との対比として「馳組軍（はせくみのいくさ）」があるわけで、右の『今昔物語集』二五―三話と合わせれば、合戦の展開について前述のような通説を形成する根拠が、一応最低限は揃っているというべきだろう。

しかし、動詞「はせくむ」や名詞「はせくみのいくさ」という言葉は、他には中々見出しにくいものである。これらの語は、たとえば、『日本国語大辞典[7]』や、『角川古語大辞典』、『時代別国語大辞典・室町編』など、現代の代表的な国語辞典・古語辞典類に立項されていない。そうそうあちこちの文献に見られる言葉ではないのである。『平家物語』でも、覚一本の場合は「馳せ組み」という言葉を見つけることができない。『保元物語』『平治物語』『義経記』『曽我物語』『太平記』も、岩波旧大系本によって筆者が検索した範囲では、この語を見つけられない。延慶本では、後述のように他に一例「ハセ組ム」があり、また、類似の語に「カケ組ム」もあるのだが、用例の豊富な言葉とは言い難いのである。

「馳組戦」は、右に見たように、合戦の分析において中心的な位置を占める重要な概念なのだが、その基礎は案外、十分堅固な地盤の上にあるわけではないように見える。しかも、『今昔物語集』の例と延慶本・長門本『平家物語』の例とでは、その用法は相当に異なる。それを検討してゆくと、「馳組戦＝馳射戦」という理解にも、実は問題があることが見えてくる。

二、『今昔物語集』の「馳組」と「射組」

そもそも、「馳組戦」という言葉が、なぜ馳射戦の意味になるのか。「馳」は馬を走らせる意味だろうが、「組」はどのような意味を担っているのか。この問題を考えるには、まず、『今昔物語集』二五―三話の例について検討する必要がある。そこで注意せねばならないのは、『今昔物語集』の同話では、一例しかない「馳組」の語の前に、「射組（いくむ）」という語が四回にわたって用いられていることである。

- （軍使の交換の後）然テ其後ニ各楯ヲ寄セテ、今ハ射組ナムト為ル程ニ…
- （良文の言葉）今日ノ合戦ハ、各軍ヲ以テ射組セバ、其ノ興不侍（はべらず）ラ。只君ト我レトガ各ノ手品ヲ知ラムト也。然レバ、方々ノ軍ヲ不令射組テ、只二人走ラセ合テ手ノ限リ射ト思フハ何ガ思ス。
- （良文の言葉）只我レ一人、手ノ限リ射組マムト為ル也。尊（みこと）達（たち）、只任セテ見ヨ。

『今昔物語集』における「馳組」の語を考察するには、まずこの「射組」との対比によって、「組」の語の意味を考えておかねばならない。

だが、この「射組（いくむ）」も用例を見出しにくい言葉である。『角川古語大辞典』『時代別国語大辞典室町編』は立項していない。『日本国語大辞典』は、「互いに矢を射合う。射かわす」意であるとして、『今昔物語集』二五―三話の他に、仮名本『曽我物語』巻一「奥野の狩の事」の、「吉川四郎、俣野にいくみてありけるが」[8]の例を挙げる。その他の用例は未だ見出し得ていない。

しかし、『日本国語大辞典』が『曽我物語』の例を挙げるのは疑問である。『曽我物語』のこの箇所は、奥野の狩で大量の獲物を得た後、山中に座敷を構えて酒宴を始める場面であり、狩りからの帰りが遅れていた山内瀧口太郎がようやく戻ってきたのを、人々が迎えたというところである。「吉川四郎、俣野にいくみてありけるが」に続くのは、「これを見て、『瀧口殿は、きゝしより、見ましておぼゆる物かな。あはれ、男かな』とほめければ、座敷にいわづらひたり」との文である。つまり、遅れてきた瀧口を、先に宴席に着いていた吉川四郎がほめているわけで、ほめられた瀧口は「何事がな、力業して、なをほめられん」と思い、やがて力自慢から有名な相撲の場面へと展開してゆく。そのような場面で、吉川と俣野が矢を射合って戦っているわけがない。「いくみて」の解釈は今一つはっきりしないものの、「居組みて」と見て、「俣野と共に座っていた」ぐらいの意と解しておくのが妥当ではないだろうか[9]。いずれにせよ、

『日本国語大辞典』の誤読と見るべきであり、『曽我物語』の例は「射組む」という言葉の用例とは見なし難いのである。

とはいえ、『今昔物語集』二五―三話の「射組」の解釈としては、『日本国語大辞典』の「互いに矢を射合う」は的確といえよう。先に挙げた「射組」の四つの例は、いずれもそのように解釈できる。つまり、「組む」という動詞が、「互いに…し合う」という意味の補助動詞のような役割で用いられているようなのである。「組む」のこのような用法は、あまり目にしないものであり、『今昔物語集』においても全く同様の例を見つけることはできないのだが、次に引く巻二三第二六話の例は、やや似たものといえるのではないか。これは、尾張兼時と下野敦行が競馬で争った話で、

（a）　既ニ三地畢テ押合テ乗組テ打追フ。

（b）　競馬ニハ並組ム程ヨリハ勝テ行ク程マデハ多ノ手有ナリ

と、二例の「組」の用例が見出せる。（a）「乗組テ」は、人が馬に乗って体勢を整える意のようにも見えるが、「三地畢テ」の文の前の段階で、人は既に馬に乗っていると見るべきであり⑩、「押合テ」の後で人が馬に「乗り組む」わけではない。「押合テ乗組テ」の現代語訳としては、小学館古典文学全集が「両馬触れ合うように一組みになって乗り」、新潮古典集成が「両馬触れ合っていどみ合い」とする。いずれにせよ、触れ合ったまま競走することは不可能であり、「組む」は組みつく意ではない。どちらも同じように馬に乗り、鞭を入れて争っている意ではないか。また、（b）の「並組ム」は、古典文学全集「二人一組で乗る」、古典集成「二騎並んで組み合う」と訳されるが、「組み合う」との表現を用いるとしても、もちろん人馬が格闘を始めるわけではなく、スタートラインに並んで、互いに相手を意識しつつ競走を始める意であろう。このように、『今昔物語集』には、両者が「互いに…し合う」、「双方とも同じように…して争う」といった意の、補助動詞的な「…組む」の用法が、わずかながら見られるわけである。

このように考えてくると、『今昔物語集』における「主共ノ馳組テ射合ケル」の一文は、確かに「良文と充が互いに馬を走らせ合いながら射合っていた」即ち馳射戦の意であるわけだが、「馳組」自体は単に「互いに馬を走らせ合う」意であって、「射合ケル」の語を伴うことではじめて馳射戦の意になっているといえよう。その意味では、『今昔物語集』では、馳射戦や騎射戦を意味する「馳組」の語は成立していないと思われる。

また、「馳組」が「互いに馬を走らせ合う」の意になるのは、「組む」を「互いに…し合う」意の補助動詞的に用いる用法によっているためだろうが、「組む」の語のそのような用法は一般的なものであるとは言い難い。もしも、「組む」のそのような用法が一般的で

あるならば、矢戦の意味で「射組戦（いくみのいくさ）」という語が軍記物語などに登場してもよさそうなものだし、あるいは他にも「○組の戦」といった語があってもよさそうなものだが、そうした例は見あたらないのである。従って、「馳組」の語が他の文献に見られた場合も、それは『今昔物語集』と同様の用法で「組む」を用いた、「互いに馬を走らせ合う」という意味の語と解してよいのかどうか、慎重な検討を要することになるだろう。

三、延慶本『平家物語』の「ハセ組」と「カケ組」

さて、先に述べたように、現在の「馳組戦」の概念は、直接的には、『今昔物語集』よりもむしろ前述した延慶本・長門本『平家物語』の和田義盛の言葉によって作られたものかと思われる。『今昔物語集』では「馳せ組む」という動詞であるのに対して、延慶本では「馳組戦」、長門本では「はせくみのいくさ」と「戦（いくさ）」の語があり、また、これに続く「真光故実」が、戦闘形態の変化を語る史料として注目を集めてきたからである。だが、「馳組戦」の語が、最初に述べたように馳射戦の意として扱われてきたのは、『今昔物語集』の充と良文の馳射戦の印象的な戦いぶりを、「馳組」の語を媒介として「馳組戦」の語の上に重ね合わせてきたことも一因となっているのではないか。つまり、『今昔物語集』の「馳組」の語と延慶本・長門本『平家物語』に見える「馳組戦」とを、基本的に同じ言葉と考えてきたように思われるのである。

しかしながら、右に見てきたように『今昔物語集』の「馳組」が「射組」と同様、「組む」を「互いに…し合う」の意の補助動詞的に用いた語と見られるのに対して、『平家物語』諸本には「射組」の語は用いられないし、「組む」の語がそうした用法で用いられているようには思えない。延慶本や長門本の「馳組戦」の「馳組」は、本当に『今昔物語集』の「馳組」と同じ言葉なのだろうか。ひとまず、『今昔物語集』の「馳組」とは切り離して、延慶本などにおける「馳組」の用例を考えてみる必要があるだろう。

延慶本には、「馳組」の語が他にもう一例ある。第二中・廿一「宮被誅給事」において、以仁王を護衛してきた信連が最後の奮戦をする場面である（長門本・盛衰記・覚一本などでは、信連が以仁王の御所脱出直後に捕えられるので、該当の場面自体を欠く。四部合戦状本のみ類似の場面があるが、該当の描写はなし）。

信連少シモサハガズ、中ヘ入テ八方チト打マハル。十余人ノ者共、皆打シラマサレヌ。チカヅク者無リケリ。「キタナシ、寄テクメ、景高。オソロシキ歟、景高」トテ、切廻ルニ、ハセ組ム者コソ無リケレ。只遠矢ニノミ射ケル程ニ…（六六オ2～5）

この場合、「ハセ組ム者」は、直前の「チカヅク者」とほぼ同義であり、「遠矢ニノミ射ケル」という戦いぶりとの対比で、接近戦を意味している。また、信連が「寄テクメ（寄りて組め）」と挑発しているのに対して、「ハセ組ム者」がなかったというのだから、「ハセ組ム」とは、馳射戦というよりは、敵に組みついて格闘する戦い（以下「組み打ち」）、あるいは打ち物（刀剣）を用いて打ち合い、斬り合う戦い（以下、「打ち物の戦」）を意味しているといえるのではないか。つまり、ここでは「ハセ組ム」の「組」は「組み打ち」の「組」に近い意味であると考えられるのである。

また、延慶本などでは、「射組」の例が見られない一方で、「ハセ組ム」と近似する可能性を持つ「カケ組ム」の語がある。「カケ組ム」は延慶本に二例ある。一つは第二末・十三「石橋山合戦事」において、佐奈田與一の従者・文三家安が、

① 幼少ヨリ、カケ組ム事ハ習タレドモ、逃ル事ハ未シラズ（六二一オ9～10）

と言う場面（長門本・盛衰記も同様）であり、もう一つは、第五本・九「義仲都落ル事」において、

② （巴は幼少から義仲と同様に育てられて）ウデヲシ頸引ナムド云力態、係組テシケルニ、少モ劣ラザリケル」（二六ウ10～二七オ1）

とある場面（他本は該当語なし）である。さらに、盛衰記巻三十三の室山合戦における乱戦の描写、

③ 源氏平家両陣乱合テ、或弓手ニ懸並テ討捕モアリ、或妻手ニ相合テ討落モアリ、四方ニ馳乱テ懸合懸組」（影印版五巻七三～七四頁。盛衰記独自記事）

の例もある。これらは、「馳組」とおおよそ同義である可能性が強いが、もし同義でないとしても、少なくとも、『平家物語』諸本における「〇組」の語の用法について考える材料にはなるだろう。

まず、①文三家安の例は、「逃ル事」と対比される「カケ組ム事」なので、戦うこと一般を指すようで、あまり具体的な意味はわからない。ただ、特に馳射戦を言うとはいえないだろう。むしろ、「幼い頃から、馬を走らせたり、打ち物の戦や組み打ちをしたりして戦うことは練習してきたが」などというように、さまざまな戦い方全般、あるいは戦うことそのものを言う言葉と解するのが穏当か。次に、②巴の例は、腕押しや首引きといった力を競う技を「係組テ」したという文脈がややわかりにくいが、「係組テ」は、駆け回りながらも時に腕力がものをいう組み打ちなどのような接近戦をすることと考えられようか。③盛衰記の例は、抽象的・概括的な戦闘描写なので、具体的な動作はわかりにくいが、「弓手ニ懸並テ…」は弓射、「妻手ニ相合テ…」は打ち物戦や組み打ちを意味するものだろ

う。「懸合懸組」とは、そうした乱戦の中で、馬を走らせたり組み合ったりしているさまと読めようか。いずれにせよ、乱戦の中で、さまざまな戦闘が行われているさまを描くものだろう。

以上、用例は少ないが、延慶本『平家物語』を中心に、「ハセ組」「カケ組」の例を見てきた。このように見てくると、延慶本『平家物語』などにおける「馳組」の「組」は、組み打ちなどの格闘ないしは肉体がぶつかり合うほどの接近戦を意味する語である可能性が強いように思われる。特に、信連の「ハセ組」の例は鮮明であり、「カケ組」の例を見ても、「組」は組み打ちを意味する感が強い。

さらに言えば、「組む」の語を単独で用いる例は『平家物語』諸本の戦闘場面に数多いが、「よれ、くまう手塚」（覚一本・巻七「実盛」[11]）、「上ニナリ下ニナリ、三ハナレ四ハナレクミタリケレドモ」（延慶本・第五本・廿五「敦盛被討給事」）などのように、それらはほとんど例外なく組み打ちを意味する。また、「ハセ組」「カケ組」とは趣を異にするが、やはり複合語である「引組む」も、「上総守が童次郎丸といふしたゝか物、おしならべひッくゝで、どうどおつ」（覚一本・巻四「宮御最期」）、「我劣ジト面々ニ引組テ馬ヨリドウト落テ上ニナリ下ニナル」（延慶本・第五本・廿二「薩摩守忠度被討給事」）のように、「組む」とほぼ同義で組み打ちを意味するのである。戦闘を描く「ハセ組」「カケ組」の「組」が、これらとは全く別の意味を持った語であると考えるのは難しいのではないか。

要するに、『平家物語』における「ハセ組」「カケ組」など、「〇組」の形の複合語は、組み打ちなどを意味する「組む」を含んだ複合語なのであって、「組む」を「互いに…する」といった意味の補助動詞的に用いる『今昔物語集』の「射組」「馳組」とは、言葉の成り立ちが異なる。両作品における「馳組」は、一見同じ言葉のように見えるけれども、実は別の言葉であると考えるべきだろう。

四、「馳組戦」と真光故実

以上、『今昔物語集』と延慶本などの『平家物語』における「馳組」について考えてきた。その結果としては、どうやら、『今昔物語集』のそれは単に「馬を走らせ合う」との意味であり、延慶本などのそれは、組み打ちなどの意味を含むものであって、いずれにしても直接的には弓矢の戦いを意味するものではないと言えそうである。だが、そのように言うためには、もう少し検討が必要である。即ち、先にも述べたように、「いくさ」の語を伴った「馳組戦（軍）」の、今のところ唯一の用例である、小壺坂合戦の「楯突軍ハ度々シタレトモ馳組軍ハコレコソ初ナレ」の検討である。

この義盛の言葉のみを単純に読めば、遠くから矢を射かけ合う「楯突軍」と、接近戦である「馳組戦」とを対比したものと読める。

だとすれば、「馳組戦」とは、馬を走らせながら近くで矢を射合う馳射戦、打ち物の戦、そして組み打ちなどを含む接近戦全般を指すと、とりあえずは考えられよう。にもかかわらず、「馳組戦」が馳射戦の意であるとされてきた最大の理由は、この義盛の問いに答えて真光が語った「馳組戦」の戦いぶりにあろう。それは、

軍ニアフハ、敵モ弓手、我モ弓手ニ逢ムトスルナリ。打解弓ヲ不可引。アキマヲ心ニカケテ、振合々々シテ内甲ヲヲシミ、アダヤヲイジト、矢ヲハゲナガラ矢ヲタバイ給ベシ。矢一放テハ次矢ヲ忿ギ打クワセテ、敵ノ内甲ヲ御意ニカケ給ヘ。昔様ニハ馬ヲ射事ハセザリケレドモ、中比ヨリハ先シヤ馬ノ太腹ヲ射ツレバハネヲトサレテカチ立ニナリ候。近代ハヤウモナク押並テ組テ中ニ落ヌレバ大刀腰刀ニテ勝負ハ候也（延慶本・第二末・六九オ10～六九ウ7）

と、概ね馳射戦・騎射戦の技術と見られるものであり[12]、しかも、「昔様」の馳射戦と「近代」の組み打ちとが対比されているという印象の強いものであった。そのため、真光の発言は、「かつては馳組戦＝馳射戦による戦いだったものが、最近は組み打ち主体の戦になってしまった」というように、馳射戦と組み打ちの対比を主としたものと理解され、さらには、それを近来の戦い方を批判する懐古趣味的な嘆息と受け取ることによって、「馳組戦」とは「かつて行われていた、組み打ちを含まない純粋な馳射戦」を言うのだといった理解さえされているように思われる。

しかし、右に見てきたように、言葉の成り立ちの面からは「馳組戦」を馳射戦と考える根拠はないし、真光は別段、本来の「馳組戦」が組み打ちを含まない純粋な馳射戦だったなどと言っているわけではない。最近の「馳組戦」では、いきなり組み打ちをするようになったと言っているだけである。逆に言えば、真光の認識においても、少なくとも現在の「馳組戦」は組み打ちを含むものなのである。現にこの後、義盛と真光が駆けつけた由比ヶ浜での戦いは、次のように描かれる。

三浦勢を多勢と見誤って引き退く畠山勢を、勢いに乗った三浦勢が散々に射る。浜の御霊（現鎌倉市坂ノ下の鎌倉権五郎神社）の前で、和田義茂が連太郎（つづくのたろう）と組み合う。「聞ユル小相撲[13]」であった義茂は、大男の連太郎を「大亘（おほわたし）」（相撲の手の一種、大渡しがけ）によって倒し、首を取る。これを見て連太郎の郎等が駆け寄るが、義茂は太刀を抜いて「内甲へ打入」、ただ一打ちに首を打ち落とす。次に、連太郎の子息・二郎が馳せ来って義茂を射るが、義茂が「お前の弓勢で遠矢に射ても、俺を討ち取ることはできないぞ」と挑発する。そこで二郎は太刀を抜いて斬りつけたが、義茂は兜の鉢を二郎に打たせておいて二郎に組みつき、ねじ伏せて首を取った。三つの

首を下げて帰った義茂は、「其日ノ高名、輪田二郎ニ極タリ」と、敵味方に賞賛されたのである。

義盛と真光の問答の後、実際に展開された戦いは、このように、弓射、打ち物の戦、組み打ち、すべてを織り交ぜた戦いであった。これは、真光が語る「昔様」の「馳組戦」とは全く異なるものだったのだろうか。おそらく、そうではあるまい。むしろ、「馳組戦」とは、もともとこのような接近戦全般を総合的に言う言葉だったのではないか。現実の戦場における命をかけた戦闘は、そのように、あらゆる手段を用いて展開されるものであるはずで、純粋な馳射戦のみで完結するというようなことは、そうそう多くはあるまい。純粋な馳射戦の典型を示しているかのような『今昔物語集』二五―三話においてさえ、近藤好和[14]が指摘するように、充（宛）は太刀を佩いていると描かれており、刀剣を使用する可能性がなかったわけではないのである。ただ、馳射戦よりも組み打ちの占める割合が増えるなど[15]、戦いぶりは時代によって変わった面があるのだろう。しかし、それは「馳組戦」のやり方が多少変わったということであって、「馳組戦」が、もともと打ち物戦や組み打ちを含まない純粋な馳射戦だったということではあるまい。

おわりに

以上、「馳組戦」の語義について考えてきた。その結果、「馳組戦」は、打ち物の戦や組み打ちを含む接近戦全般を言う言葉であったと考えられる。その意味では、最初に述べたように、従来、「馳組戦」を馳射戦の意味に用いてきたことは適切ではないと思われる。だが、それは言葉の使い方の問題であって、本稿は、とりあえず、従来の通説に対して用語の言い替えを要請しているに過ぎない。つまり、仮に本稿の考察が正しいとしても、従来の議論は、当面、「馳組戦」を、「馳射戦」あるいは「騎射戦」と言い替えるという以上の修正を必要とはしないはずである。

ただ、最近はさまざまな修正が加えられているとはいえ、「馳組戦」に関する従来の議論は、ややもすれば真光故実から「馳射戦から組み打ちへ」という図式を引き出し、「昔様」の戦いを純粋な馳射戦として思い描くことに熱心でありすぎたように思われないでもない。武士が戦闘の専門家として修練し誇示する技術の中心が、「弓馬のわざ」即ち馳射・騎射にあったことは疑いないが、現実の合戦が一時期にせよそれのみによって展開されていたのかどうか、源平合戦期に起きた戦闘形態の変化とはどの程度大きなものだったのか、などといった問題については、なおわからない点も多いので

はないか。そうした意味では、「馳組戦」の語義の再検討が、平安時代の戦闘の実態を思い描く上で役立つことも、皆無ではないと思われる。

注

① 川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ―治承・寿永内乱史研究―』一六頁（講談社一九九六年四月）。

② 近藤好和『弓矢と刀剣―中世合戦の実像―』九三頁（吉川弘文館一九九七年八月）。

③ 高橋昌明『武士の成立、武士像の創出』二三五頁（東京大学出版会一九九九年一一月）。

④ 『今昔物語集』の引用は、岩波新大系による。振仮名は適宜省略した。

⑤ 延慶本『平家物語』第二末・十四「小壺坂合戦之事」六九オ7。延慶本の引用は汲古書院刊影印本により、私意に句読点・濁点及び必要に応じて振仮名を付した。

⑥ 源平盛衰記巻二十一。慶長古活字本の勉誠社版影印により（第三巻三一五頁）、私意に句読点・濁点を付した。なお、盛衰記の場合、延慶本・長門本とは場面設定が異なり、「小坪坂ヲ打下リ」、河を隔てて敵と対峙した状況での会話である。

⑦ 『日本国語大辞典』（小学館）は、二〇〇一年発行の第二版による。

⑧ 岩波旧大系『曽我物語』七八頁。なお、彰考館本（伝承文学資料集上巻四一頁）は「吉川二郎」とするがほぼ同文。太山寺本（和泉古典叢書）や、真名本（角川貴重古典籍）・真名本訓読本（小学館新編古典文学全集）には、この語またはこの場面自体がない。

⑨ 「居」は規範的な仮名遣いでは「ゐ」だろうが、岩波旧大系『曽我物語』の底本とされた十行古活字本では、「座敷にいわづらひたり」のように「い」と表記されている。

⑩ 「三地」は、「三遅」とも。出走前に行う地乗り」（岩波新大系）、「競馬発走の時の作法」（岩波旧大系）などとされる。

⑪ 覚一本の引用は、岩波旧大系による。

⑫ 近藤好和（前掲注2書一五八頁以下）は、盛衰記では馬を静止した状況での発言であることに注意し、真光故実には、静止した馬上での戦いに関する指示という面があるとする。

⑬ 「小相撲」は、「素人が相撲を取ること。また、その相撲」（『角川古語大辞典』）とされる。

⑭ 近藤好和前掲注2書九四頁。

⑮ 組み打ちの戦が増加した原因としては、注1～3に挙げた諸書などで議論されているが、筆者は功名のために敵の首を狙うことが増えたことが重要であると考えている。拙稿「組み討ちをする武士達―真光故実から―」（『湘南文学』一六号、二〇〇三年一月）参照。

（付記） 本稿は延慶本注釈の会の成果による部分が多い。同会における諸氏のご教示、とりわけ近藤好和氏のご教示に感謝する。